

第2回文屋座セミナーレポート

ヒラメキとトキメキの瞬間! トライアングル

講師：井内由佳さん・高野登さん・鈴木成一さん



と き：2011年11月26日(土)

と ころ：朝日生命大手町ビル・セミナールーム
丸の内ホテルレストラン TOKYO JOHN BULL (東京都千代田区)

進行内容

【お話の会】

＝第一部＝

14:00 井内由佳さんのお話 「神さまが教える世の中の道理、幸福への道」

14:45 高野登さんのお話 「一瞬で心が通う『言葉がけ』の習慣」

15:45 休憩 名刺交換・ご挨拶タイム

＝第二部＝

16:00 鈴木成一さん、高野さんと井内さんのトークセッション
「ヒラメキとトキメキの瞬間! トライアングル」

17:00 閉会

【お祝いパーティー】

東京ジョンブル

17:30 開会～19:30 閉会(20時 散会)



『わたし、少しだけ神さまとお話できるんです。』

著者：井内 由佳

定価 1,470 円(本体 1,400 円+税)

ISBN 978-4-9905552-2-1 C0011 ¥1400E

初版第一刷発行 2011年9月19日

第三刷発行 2012年1月27日

ブックデザイン 鈴木成一デザイン室

撮 影 古川耕伍

推薦文 高野 登

2011年5月に初めて開催した「文屋座」。2回目の今回は、『わたし、少しだけ神さまとお話できるんです。』の発刊を記念して、ご著者の井内由佳さん、装丁を担ってくださった鈴木成一さん、帯に推薦のメッセージをお寄せくださった高野登さんを講師にお迎えしました。それぞれの分野で大活躍される御三方から、「ヒラメキ・トキメキの瞬間」をキーワードに、お話をうかがいました。

さらに、『世界夢ケーキ宣言! ～幸せは家族だんらん』のご著者で、菓匠 Shimizu (長野県伊那市) シェフパティシエの清水慎一さんが、心を込めた焼き菓子のプレゼントとともに、特別出演してくださいました。

当日語られた主な内容を編集したレポートです。どうぞご覧ください。

人生を決めるのは自分の思い

井内由佳さん

神様は「神様を信じる人」が好き

神様に好かれて、神様から願いを叶えてもらえるための柱が、3つあります。

1つ目は、神様の好きな人は、「神様を信じる人」ということです。家に神棚があって朝晩お詣りをしている人とか、困ったときや願いごとがあるときに神社や神棚で手を合わせる人ではありません。神様を信じる人とは、「神様の目を意識する人」、つまり「人の目を意識しない人」です。

神様を信じない人は、人の目ばかり意識します。「こう思われたい」「こう思われたくない」という意識が強いので、思われたい姿に自分を演出します。たとえば男性なら、2通りに分けられると思っています。虚勢を張って、羽振りがいいと思われたいタイプの人は、なんとなく「自分はお金があるんだ、力があるんだ」というふうには振る舞います。あるいは、人から巻き上げられるのが怖いから、防御するかのようになり、「ない、ない」と演出します。もう1つのパターンは、時と場合によってあるように見せたり、ないように見せたり、いろいろな形で自分を演出する人です。

人の目を意識して、自分を演出するときは、だいたい、「神様がこの世にあって、すべてを知っている」という気持ちがないときです。人の目を意識する人は、自分を演出しないといけないので、ウソや言い訳が多くなります。そういう人は、一生懸命お願いごとをしても、悩みごとを頼んでも、神様に聞いてもらえません。

神様の好きな人は、神様を信じている人だから、物事を人のせいにはしません。神様を信じない人に限って、今、出ている結果が、自分の考えたこと、したことの結果だと思いきれず、「あの人がこうだったから、こうなった」というふうを考えてしまいます。神様を信じている人は、今は、いままで自分の考えてきた・してきたことの結果だとはっきり自覚できています。

「人から好かれる人」になる

「神様を信じる人」と併せて、神様の好きな人は「人から好かれる人」です。

人から嫌われる人と、神様から嫌われる人の共通点は、だいたい次の3つです。

1つ目は「嫉妬心、競争心の強い人」。こういう人と一緒にいると疲れるし、心も疲弊します。

2つ目は「うぬぼれの強い人、自慢話の多い人」。うぬぼれていると、何でも自分の力のおかげだと思ひ、感謝の心も薄れてしまいます。

3つ目は「ケチと欲張り」。ケチというのは、自分のことにはたっぷり使うのに、人のことには使わない人。欲張りというのは何でもほしがる人です。ケチと欲張りはセットです。

神様から願いを叶えてもらったり、悩みを解決したりしてほしいなら、まず人から好かれることです。ただし、人から嫌われている人から嫌われることは、関係ないそうです。人から嫌われている人は、競争心や嫉妬心、うぬぼれが強くて、うまくいっている人や、人から好かれている人が嫌いだからです。ただ、「人から好かれている人から嫌われているようでは、神様からも嫌われてしまいますよ」と言われました。

神様は「プラスの差を持っている人」に与える

神様から救ってもらえる2つ目のポイントは、神様は、祈る人を救うのではなく、自分と相手との差に動くということです。

たとえば、兄弟が何人かいるのに、自分だけが親の面倒を見ているときに、自分だけがばかばかしい思いをしていると感じるかもしれません。けれども、面倒を見ていない兄弟と自分との間には大きな差があります。その差に対して、神様は何かを与えたり奪ったりします。プラスの差を持っている人は、神様から与えられる人生を送ります。「自分は忙しいから、遠くにいるから、できない」と兄弟に任せきりにすると、マイナスの差ができ、神様から何かを奪われます。

与えてもらえる人になるためには、人に多くを与えることです。してもらいよりも、してあげる人間になることです。してほしい気持ちの強い人は、奪われます。自分の心や時間やお金を、惜しみなく人に使えば、その分は必ず返ってきます。

いやな思いをしてもがっかりしたり、言い返してわからせてやろうと思ったりしないでいいのです。思わなければ思わないほど、神様の力が動いて、気の済むようになるのです。

他人に対して思っていることが自分の人生をつくる

3つ目です。自分の人生は、ある程度自分でつくることができます。他人に対して思っていることが、自分の人生をつくるのです。

人間も動物の一種で、本能があります。自分と自分の子どもをかわいがり、守ろうとするのは、動物も、善人も悪人も同じです。ですから、家族に対してではなく、他人に対して思っていることが、自分の人生をつくります。人間という生き物だけが、自分の家族や子ども以外のものに心をかけて、大事にして、守ります。

動物は、生存競争が活発ですから、威嚇します。人間も本能的であればあるほど、人に心遣いができなければできないほど、人を威嚇します。疑心暗鬼になって、人の悪いところを探します。それは動物と同じなので、神様はあまり好きではありません。人間という生き物だけが、理性があって、他人のことを考えるのです。人間は、他人に対して思っていることを自分にさせます。

よく「自分がしていることをされる」と言われますが、それは少し間違いです。していることと思っていることが違うときがあるからです。「おめでとう」と言いながら心の中で悔しがっていたり、「応援しているよ」と言いながら「失敗しろ」と思っていたりすると、その思っていることをされるのです。神様は、言うこと、やることをあまり見ません。

たとえば、誰かが結婚して、みんな同じように5万円ずつお祝いをしたとします。Aさんは心から祝福し、「せめてこれくらいはさせてください」とお祝いを贈ります。Bさんは、「Aさんと同じようにしないと、ばつがわるいから」と思って贈ります。Cさんは「このお金があったら、あれが買えたのに」と惜しみながら贈ります。やったことはみな同じですが、心は三方に分かれていて、結果も三方に分かれるのです。

神様を信じている人は、思っていることとして思っていることがだんだん一致してきます。思ってもいないことをしても無意味だし、いい結果が出ないとわかるから、思っていないことはできなくなります。していることに心がこもるようになります。

人に言葉をかけたり、物を贈ったりしたときに、言葉や物だけではなく、心が必ず相手に届いています。することではなく、自分が何を思っているかを意識してください。

人間の欲しいものは、およそ「健康」「お金」「いい人間関係」「時間」の4つに集約されるでしょう。これらが欲しいなら、まずそれらを与えることです。健康でありたいなら、人に対して、憎む、恨む、競争するといった気持ちを抱かず、優しい気持ちを与えることです。

していることがどんなに立派で優しいことでも、思っていることが冷めた気持ち、競争する気持ち、相手の失敗を願う気持ちなら、結局は自分の健康を損ねて、人間関係がこじれます。健康や人間関係で不安を抱えているとしたら、自分は誰かに憎しみ、恨み、競争心をもっていないか、自分の胸に問うてみてください。そこがわかって、改善されれば、健康と人間関係は改善されると思います。

人に心をかけるときに、「私はお金と時間がないので、自分にできることをします」と言う人がいますが、人に心をかけているのに、人に使うお金と時間の準備がない、ということはありません。自分のお金と時間をさしのべる心の準備があつて初めて、「人に心をかけた」と言えるのです。「それはできません」と言うようでは、人に心をかけたとは言えません。

以上が、「本当に幸せになりたいなら、この3つを守りなさい」と、いつも神様が言うことです。

優先順位をわかる

大人には、「優先順位をわかる」という務めがあります。親孝行や、老人ホームへの慰問、人に物を分け与えることがいいことだというのは、小学生にもわかりますが、優先順位は大人にしかわかりません。

どんなにいいことをしても、優先順位を間違えると、悪い結果を生み出す元になります。たとえば親なら、義理の親から大事にするという心がけていることです。また、人に時間とお金を遣うときに、誰から遣うのか、その順序は大人にしかわからない大事なことです。

私は神様から教わった、人間が幸せになれるための考え方を、一人でも多くの方に伝えていくことが自分のミッションだと思って、日々喜んでこの仕事をしています。これからもみなさんにお伝えできるようなお告げがおりるように、私も精進していきたいと思います。



井内由佳さんプロフィール

福岡県生まれ。福岡大学商学部卒業。大学卒業後、株式会社リクルートに勤務。1989年、神さまからのお告げがおりる。1991年より、夫が経営する輸入自動車販売会社の取締役を務めるかたわら、自宅で人々の相談に応じ、神さまが教える「幸福になるための考え方」を伝え続けている。

2011年9月、初めての著書『わたし、少しだけ神さまとお話できるんです。』（文屋）を出版。2012年3月、新刊『井内由佳のしあわせスパイラル』（日本文芸社）を上梓。福岡市在住。二男二女の母。

<http://yuka-i.com/book1/>

<http://ameblo.jp/yukauchi/>

神様の目を意識する。 誇りと自信をもって生きる。

高野 登さん

不幸の始まりは己を知らないことにある

井内さんの本を、あらゆるところに付箋を貼って読みました。

本文中に「不幸の始まりは己を知らないことにある」とあります。「なるほど」と思いました。

ホテルマンというのはどうしても、「お客様や仲間からどう思われたのか」「自分は相手にとってどういう存在でなければならないのか」ということに、エネルギーを注いで考えます。私自身も、自分の後輩やスタッフにそういう指導をしてきた部分が随分あります。そこには「神様からどう思われたいの？」という一言が抜けていました。ですから、最初にこの本を読ませていただいたとき、後頭部をハンマーでガツンとやられた気分でした。

会社で人を採用するときに、「こういう人が来たらいいですね」「うちにはこういう人しか来ないんです」と言うことがあります。誰がそういう人を引き寄せてしまったのかというと、結局自分です。「うちはスタッフが全然育たないんです」と言うとき、ではその人を採用し、育てているのは誰か、ということになってしまいます。

その人の幸福感、不幸感というのも、その人が自分を知っているか、知らないか、謙虚になることで決まっていくんだなとわかります。

未知の自分と出会う瞬間

今でこそ、こうして人前で話していますが、私は中学1、2年くらいまで、人前に出ることができませんでした。ものすごい引込み思案で、今で言うひきこもりの一歩手前でした。

それほど苦手だったのに、なぜホテル業界に入ったのかというと、1枚のハガキとの出会いがきっかけでした。

私は商業高校に行きました。商業に行って、簿記を習って、帳簿のつけ方を覚えれば、人前に出なくて済むと思ったのです。けれども入学後、先生に「人前に出ない仕事がしたい」と言ったら、「じゃあ、進路を変えなさい。理工科系の大学に行って研究者になれば、人前に出なくていいから」と言われました。そこで、急いで進路変更を考えました。

受験勉強をしていた高校3年のころ、受験雑誌の中の1枚のハガキに出会いました。日本最初のホテルスクール開校の案内でした。普段、そんなものは目に留めませんが、なぜかそのときハガキを切り取って、自分の机の上に置いたのです。毎日見ていると気になって、ついに「資料くらい請求してもいいだろう」と思い、資料を取り寄せました。それが、私が入学したプリンスホテルスクールの開校案内でした。

そのとき私が知っていた「ホテル」というのは、長野の湯田中の温泉ホテルでした。東京のシティホテルになど、足を踏み入れたことがなかったのです。けれども、その資料をもらったときに、なぜかアメリカ人と一緒に外国のホテルで働いている自分の姿が鮮明にイメージできました。自分の中で、何かが「カチツ」と音をたてました。自分の中でカギが外れて、少しだけドアが開いて、ずっと閉じこもっていた何かが現れた感じでした。

私はその資料を持って先生のところに行き、「もう一回進路変更します。ここにいきます」と言いました。先生は呆れていました。親からも「は？」と言われましたが、自分だけで決めてしまいました。

おもしろいもので、人は何かの拍子に自分のエネルギーが一気に凝縮される瞬間があります。自分の知らないところにある、自分には見えないもの。それまで自分の中で「表」だと思っていた、人見知りの部分の裏に、違ったものもあるのだと思います。

ホテルスクールの2年間は、自分の最も苦手なもの、つまり人の中に入って、人と話をする時間をトレーニングする時間でした。今、それが本職になって、しかも一番苦手なはずの、人前に立って話すことをある程度ビジネスにしています。不思議なことですが、おそらく、自分の最も得意とすることを天職にしていく人と、最も苦手なものを天職にしていく人と、両方あるような気がします。

ホテルマンを志す人にも、そういう人が大勢います。その人たちの気持ちは痛いほどわかりますから、「こういう性格じゃ無理ですよ」と言われても、「大丈夫、できますよ」と答えることができます。「私が経験したような瞬間が来るかもしれない。だからあらゆるところへ興味のアナテナを立てるといいですよ」という話もできます。

私が人前で話せなかったことを聞いた人は、それで励まされて、元気になってくれます。人って、不思議ですね。

生き方の安全弁を思い切って外す

井内さんの本の中で、最初に心に刺さったのは、次の言葉でした。「たとえばあなたがおいしい料理を作るためのレシピを手に入れたとします。でも体を動かさなければ、じっと待っていても料理は食卓にのぼりません。人生も同じ。神様のお告げが幸せのレシピ」。この「神様のお告げが幸せのレシピ」という表現がとてもおもしろいと思いました。

同時に、多分、神様のお告げを聞くことができない人も、何かの瞬間に、自分の心の扉に刺さってくるものはあると思いました。それは思い切って信じてしまっていないのではないのでしょうか。安全パイとして、あるいは安全弁があるから、やってみるというのではなく、自分の生き方の安全弁を外してみるのです。するとまったく違った景色が目の前に出てくるかもしれません。

先日、非常におもしろい人に出会いました。あるときスイッチが入って、銀行マンから広告代理店の企画マンに転身して、どんどん新しい企画を出していく腕利きになった人です。私が「なぜ銀行マンから企画マンになったんですか」ときくと、彼が「事故みたいなものです」と答えました。じつは私も、「なぜホテルマンになったのか」ときかれたときに、同じ答えを言っていました。

幸せのレシピがおりてきたときに、それを見て、最初の一步を踏み出して料理を作るか、作らないか。知識やスキルを身につけ、頭の中にたくさんレシピを蓄えるのはいいのですが、大事なことは、そのレシピに感動して、「自分はこのレシピのこれでいく」と決めて、行動に落としこんでいくことだと思います。

自分が気持ちよくなるために話していないか？

井内さんの本に、「人が喜ぶ話と、自分が喜ぶ話を、きっちり仕分けましょう」とあります。これにはドキッとしました。ホテルマン時代に、若いスタッフを「飲みに行こう」と誘って、つい、自分が話したいこ

とばかり話して、うっとりしてしまうことがありました。本来その場で話そうと思っていた意図からどんどん離れていることに気づかないのです。「無意識でも、知らせたいという気持ちで話しているなら、だいたいこうとおしげられているものです」という井内さんの言葉を読んで、「なるほど、そういうことだよな」と思いました。

彼らは私の後輩だから、「うっとおしい」という顔をしませんでした。我慢してくれていたのだと思います。今、彼らに会ったら、謝りたいです。あとき誰と一緒に飲んだのか、思い出そうとしますが、お酒が入っていたので全員思い出せません。2、3人を思い出して、「僕はこういうふうに話したことが結構あったよね」とメールを送ると、社交辞令で「そんなことはなかったのでございます」と返事が来ました。「やっぱりしていたんだな」と、その返事でわかりました（笑）。

自分の中によいものを残すフィルター

もう一つ、ドキッとしたのは、「自分の中に濾過装置をもつ。フィルターによって受けとめ方を変える」という言葉です。人の言葉が耳から、人の態度が目から、その場の雰囲気から、体の中に入ってきます。それらの何を気に留め、何を見過ごすか。その人のフィルターによってまったく受けとめ方が違ってきます。そしてそのフィルターに残ったもの、それが自分の心を作っていくわけです。

ホテル業界で、使っちゃいけない言葉ですが、「クレマー」という言葉を使ってしまうことがあります。お客様からクレームを聞いたときに、「嫌だな。今日は嫌な人に会っちゃったな」と思った瞬間に、それが残って、自分の心を作っていくわけです。

ついこの間、女性のホテルマンと対談をしたときに、彼女は「自分が人からクレームを言われ、痛い言葉、つらい言葉をかけられると、その10倍の優しさを返すんです」とおっしゃっていました。意識せずに神様からのメッセージを一杯もらっている人なんだらうと思います。

施した恩は水に流して

これはどうしても伝えたい言葉です。井内さんは「最後のお金を遣いなさい」と書いていらっしゃる。「神様は、人のためにお金を遣うときは、最後のお金を遣いなさいと言います。最後のお金とは、ありがとうございます、おめでとうございます、お悔やみ申し上げますと、せずにはいられなくて包んだお金のこと。つまり、見返りも何もなし、その先がないお金のこと」と。

多くの場合、特に長くビジネスの世界にいと、お金を使うときには、心のどこかで必ず見返りを計算しています。「この投資をすると、どれだけの見返りがあるか」を考えることが習慣化してしまっているのが、残念ながらビジネスマンです。

ではビジネスから離れたときに、我々は家族や友人に対して、「最後のお金」をきちんと遣うことができているのでしょうか？

私の好きな言葉で、「施した恩は水に流せ。受けた恩は石に刻め」という言葉があります。実行するのは非常に難しいのですが、それでも神様に好かれて、人間らしい最期を全うするためには、そのことを意識するしかないのでしょう。

国境を越えて、誰もが大切に思うもの

井内さんのおっしゃる「神様」とは多分、我々がとらえるべき存在としては、宗教の区別にかかわらず、「偉大なる存在」というものだろうと思います。それを意識するかしないか、畏れをもっているかどうかを人生を分けるのでしょう。

私はアメリカに20年暮らし、24カ国の人たちと一緒に仕事をしました。身の回りにはあらゆる宗教の人がいました。その中で、「この人は間違いなく、こういうことを大事にしているな」と感じる人がたくさんありました。

私が、ニューヨークのプラザホテルからロスアンジェルスへのボナベ

ンチャーホテルに転勤が決まったときに、私のボスが私のためにサプライズのパーティーを開いてくれました。「ちょっとしたパーティーをやるから、この日の何時から何時までは空けておきなさい。最後だから、ちゃんとみんなにあいさつをしないとイケないよ」と言われました。きっとホテルの従業員だけで、身内のパーティーをやるのだと思っていました。

当日、プラザ合意が調印された歴史のあるホワイト&ゴールドという部屋に呼ばれて行くと、スタッフが5、6人いました。営業スタッフだけでやるのかと思ったら、そこを出て、プラザホテル内最大の宴会場に案内されました。なんと300人も呼んでくれていました。彼らを知るはずもない私の友人まで、よくぞここまで誰にも知られずに……ということを見事にやってくれたのです。さすがにその日だけは、涙をこらえきれずに泣いてしまいました。

ミスティークやサプライズは、リッツ・カールトンだけのお家芸ではありません。アメリカ人も、一緒に働いていたヨーロッパやアジア、南米の仲間も、みんなでそういうことをおもしろがってやるのです。そういう感性にも、国籍を越えた共通項があるのでしょうか。

一方、私がサンフランシスコのフェアモントで3年間の契約を終えようとしていたときのことで。オーナーから「どうするんだ?」と問われて、私がおもむきでいると、オーナーはすぐ近くで建設中だったリッツ・カールトンを指さして、「やっぱり気になるか?」と言いました。「ちょっと気になる」と答えると、「じゃあ行けばいいよ」と、次の契約を更新しないで送り出してくれました。

リッツ・カールトンに移ってかなり経った後、オーナーのシュルツィから、「フェアモントのオーナーからこういう手紙が来ていたよ」と聞きました。手紙の最後に「日本人の息子が行くから、よろしく」と書いてありました。そんなことはおくびにも出さずに、「やってみよう」とさえ思わず、さりりとやってしまう。「キメ細かさ」はなにも日本人独特の感性ではなく、国境を越えても変わりはありません。そういう環境でずっと仕事をさせてもらえたことは幸せでした。

価値観を自分の真ん中にしっかり据える

リッツ・カールトン東京を開業する前に、とある場面を見ました。地下鉄で移動しているときに、六本木で列車が止まって、すらりと背の高い、モデルさんらしい人が乗ってきて、つり革につかまりました。しばらくすると、彼女は腰をかがめて、目の前の女性と話を始めました。知人がいたのかと思いましたが、どうも違います。すると声をかけられた年配の女性がハッとした表情で、自分のブラウスのボタンを留めはじめました。ところが手が不自由でなかなか留まりません。見ていた彼女がもう一度腰をかがめ、さりと言、「お手伝いしますね」と言って、素早くボタンを留めました。

着替えに慣れているモデルさんですから、ボタンを留めるなんて朝飯前です。しかしそれを見ていて、私は心の中で拍手をしました。

彼女が次の駅で降りていくときに、年配の女性が何回も頭をさげていました。心の中で手を合わせていたことでしょうか。私も心の中で叫んでいました。「リッツ・カールトンで働きませんか!」と(笑)。日本もまだまだ捨てたものではありません。

先日、山手線に乗ったとき、またある経験をしました。ある程度混んだ電車の中に、三十代くらいのお父さんと未就学らしい子どもがいました。そこに年配の女性に乗ってくると、その子は「パパ、僕、立つからね」とその女性の方へ行こうとしました。するとお父さんは、その子の膝に手を置いて「あと一駅だから」と言って制したのです。その子はさらに「いいよ、立つよ」と言って、お父さんの手を振り払い、その女性を連れてきて座らせました。これは拍手ものですね。

次の駅で親子は降りていきましたが、見ていたら、そのお父さんは子どもの頭を叩いて叱っていました。非常に考えさせられた場面でした。

今、いろいろなことが過渡期を迎え、混乱しています。自分の中に価値観をきちんともっていないと、人は安きに流れていきます。井内さんがおっしゃった「神様の声を謙虚になって聞く」というのは、自分の生き方そのものを自分でしっかりと決めているかどうかということではないでしょうか。

今朝、タクシーで移動していたときに、信号待ちをしていたアジア人の男性グループ6、7人が缶コーヒーか何かを飲んでいました。信号が変わると、全員、持っていた空き缶を垣根に放り投げて渡っていききました。近くにいた子どもたちが見ていました。外見上は国籍の区別もつきにくいので、日本人の大人がゴミを捨てて行ったと思ったかもしれません。すると、「飲み終わった缶は道に捨ててもいい」というスイッチが入ってしまう可能性があります。恐ろしいことです。

これからのグローバリゼーションで、一番大きく変わるのは職場です。外国から、相当程度、高学歴、高スキル、高知識を身につけた人たちが来て、日本人よりも安い労働力として雇われる可能性があります。そこで一緒に働くときに、日本人が日本人として堂々と仕事ができるためには、日本人としての誇りと自覚をど真ん中に持っていることしかないように思います。

「戸隠山に顔向けできないことはするな」

神様の声を聞く。あるいは、神様の声を意識する。自分は常に神様に見られているという感覚をもてるかどうか。

信州の戸隠で生まれ育ったわたしは、子どものころから、「戸隠山に顔向けできないことはするな」と親から言われて育ちました。戸隠山そのものが、偉大なる神のような存在でした。若いころには、ふと、悪いこと、企み事をしそうになりますが、私はアメリカ滞在中も、常に戸隠山を意識していました。戸隠山の存在の大きさの前で、道を踏み外さずに済んだのです。

日本人でも、空き缶を捨てる人はいますが、今後は「ゴミはどこに捨てたっていいんだ」という文化をもつ人たちが、すごい勢いで日本に入ってくるかもしれません。そのときに、日本人としての誇りと自覚をもった我々に、何ができるでしょうか。空き缶を捨てた人に注意をする。あるいは、それを拾うという行為を子どもの前で見せる。そういう行動力と、自分たちの町や国を大事に愛する感性が、子どもにとって大きな励みになる時代が来ているように思います。

手始めとして、小さなことですが、新幹線を降りるときに、人が残して行った缶や雑誌をできるだけ集めて、ゴミ箱へ捨てるようにしています。自分の出したゴミを座席に残していくとき、その人は間違いなく、大事な運をそこに落としていってしまうと思います。私は勝手に「落ちている運は、せつかくだからもらえばいい」と解釈して、やっているのです。

ゴミを残していく人は少なくありません。見るたびに「また運を置いて行ったな」と思います。

その一方で、それを全部集めていくのもどうかと思ってしまいます。「あの人、ゴミを集めてどうするのかしら」と怪訝に思われているのかと、人目を気にしてしまうのです。……人の目を意識しているうちは、まだダメですね(笑)。

高野登さんプロフィール

人とホスピタリティ研究所 代表、前リッツ・カールトン日本支社長。長野県生まれ。著書『リッツ・カールトンが大切にしている サービスを超える瞬間』『絆が生まれる瞬間』(かんき出版)。最新刊は『リッツ・カールトン 一瞬で心が通う「言葉がけ」の習慣』(日本実業出版社)。文屋の『いのち輝くホスピタリティ ～医療は究極のサービス業』(望月智行・著)で、望月氏(川越胃腸病院長)、大久保寛司氏との対談「笑顔のひみつ」で語り合っていました。

人の心に届くはたらき

井内由佳さん 鈴木成一さん 高野登さん

<http://www.e-denen.net/syoseki/inochi.html>

著者の才能を形にして伝える

鈴木 井内さんと初めてお会いする前にグラという形で原稿を読ませていただき、内容は理解していましたが、最初に井内さんにお会いしたときに、装丁をあの形でやることその場で決まりました。人をワクワクさせ、巻き込むようなオーラが出ていて、茶目っ気があり、人を惹きつける魅力に満ちていたので、それをそのまま本に表現できれば人は注目してくれるだろう、それを出せば私の役目は終わるだろうと確信しました。

高野 表紙の帯に書かせていただきましたが、「オーラ」というより、もっとキラキラとした「オーロラ」のようなイメージを私も感じました。

鈴木 そうですね。キラキラした感じですね。

私にとって著者というのはみんな神様みたいなものなんです。著者というのは、ある考えなり、創作した物語を通して、多くの人とコミュニケーションをしていきます。その才能自体が、私から見れば超越的で、神にも等しい。実体はありませんが、それを何とか形にしようというのが、私の仕事ではないかと思っています。

高野 井内さんは、鈴木さんと出会って、何を感じましたか？

井内 「プロフェッショナル」のビデオを何回も観てから伺ったので、「あ、ビデオと同じ」と思いました。

鈴木 番組の内実を話しますと、2、3カ月の間、常に傍らでカメラが回っている状態で、演出はまったくしないんです。インタビューは受けましたが、基本的に仕事をやってる最中は全然口出しをしないので、それが忠実に再現されているだろうと思います。それにしても、番組はいいとこ取りなので、いい具合に伝わったんでしょうね。

無限の可能性から不可欠なものだけを選びとる

高野 井内さん、自分の思いを本という媒体にしてメッセージを残さなければいけないという強い思いはいつ、どういう形で芽生えましたか？

井内 今年の2月です。すぐ行動に起こして、9月には発売になっていました。神様から教えていただいたメッセージを伝えたいと思い、

ブログを書いていたので、それをまとめて本になるかどうかを木下さんにご相談しました。

高野 本の書き方には2つあると思います。一つは、自分の思いを一つずつ組み立てていって形作るというやり方。

もう一つは、仏像をつくるのと同じで……仏師は、木を見た時に「この中に仏像がいる」とわかるといいます。それを掘り出してあげる作業をすればいいと。仏像がない木もあって、「この木でこういう仏像を彫ってくれ」と言われたら、がんばって仏像の形を作るのですが、本来は、木の中にいる仏像を自分が丁寧に掘り出してあげればいいそうです。

本も同じだと思います。あつという間にできてしまう本は、自分の中に、思いという形で、既に本がある。その本を頭の中から彫り出して形にしていくことだろうと思います。井内さんの本は、そうやってできたんでしょうね。一生懸命、作ろう、作ろうという感じではないんです。

井内 そうですね。あつという間にできました。みなさんがご協力くださったおかげですが。

高野 そういう本だから、鈴木さんもお会いになって、パッと決まっていたのではないですか。

鈴木 装丁も彫刻に似ていると思います。本というものの中には、紙という要素も入っているし、印刷も、写真や絵も、書体もいろいろあります。それらを組み合わせると、可能性は無限にあります。その中から、その著者や内容に最もふさわしいものを求めて、ノイズを削って、消していくんです。不可欠なものだけを残して、いらぬものはどんどん削ぎ落としていきます。

井内さんの本は、最初からそこがはっきり見えていたので、書体から配置から、まったく悩まずにやることができました。それだけ盤石な内容が既にあったと思います。井内さんのキャラクターも含めて。

人を喜ばせるものこそが「仕事」

高野 井内さんの本に限らなくていいと思いますが、鈴木さんは装丁を通じて世の中に何を届けたいのかなということに、興味があります。

鈴木 ちょっと極端ですが、私の人生はほとんど「来週の締切をどう



左から、鈴木成一さん 井内由佳さん 高野登さん

乗り切るか」ということだけにかかっています。将来性とか予定、計画といったものも、自分の人生も、そのためだけにあつて、そこをどうこなすかということだけです。

私は仕事を頼まれるとほとんど断りません。来るもの拒まずで、どうしても時間がなくて断ることはありますが、私に何かを期待して声をかけてくださったのだから、何か応えなければおかしいだろうと思うんです。ですから、内容的な理由で断ったことはありません。

それは自分の性格にも合っています。要するに、何かボールを投げられたときに、どんなボールを投げ返すかというのが、私の仕事になります。それに向いているんです。人から投げられることでリアクションするというか。

大学時代には結構自由な時間があつて、半ばアーティストのように、自分の作品を自主的に作ったこともあります。それがどうにも好きになれませんでした。絵でも何でも、自主的にやったものには満足がいけないというか、「成し遂げた」という実感が全然ないんです。逆に、ポスターなどを人から頼まれてやったときに、印刷物ができて、相手に喜んでもらえる、自分の中では一番充実していました。それをずっと繰り返して、25年以上やっています。そういう人生です。仕事をしているうちに、また頼まれて、締切が来て、それをこなして。その繰り返しです。考えてみれば、依頼された見えないものを見えるもの、形にするだけなんでしょが、それを精一杯やってきたということなんです。

高野 ある意味、非常に芸術性の高いデザインをたくさんしていらっしゃるの、ある種の芸術家も持っている使命感とか、「これは絶対に外さないんだ」というものがあるのかなと思ったんです。

たとえば、同じ塗り物のお皿を作るにも、芸術作品として展示されるお皿よりも、食卓に並ぶお皿を作るほうが好きなんですか？

鈴木 私にとって一番身近な人は、編集者です。基本的には編集者とのやりとりだけで、直接読者と接することはありません。要するに、編集者から仕事の依頼があつて、原稿を読んで、どういう方向性でいくかと話し合つて、それにかなったデザインをします。色校正が出て、見本ができたときに、編集者が喜んでくれるわけです。だから編集者をいかに喜ばせるか。

私はどこにも所属せずに個人で仕事をしているので、1つの仕事を終えたらそれで解雇されるようなものです。何の保証もありません。次の仕事をもらうためには、1つの仕事を喜んでもらつて、また次も頼んでもらう。その繰り返しだけです。だから、私にとって一番重要なものは、編集者の反応です。喜んでほしいがためにやっています。ひいてはその先につながる読者、皿の喩で言うと、より多くの人が喜ぶ皿ということになりますね。

井内 神様の教え通りですね。仕事というのは、人を喜ばせるのが「仕事」、人を喜ばせないのは「作業」だと教わりました。鈴木先生は「プロフェッショナル」のビデオで、「プロフェッショナルとは？」という問いに、「次の仕事があること」って答えていらっしゃいました。

鈴木 裏を返せば、そこで止まってしまうことの恐怖があります。何とか、そうならないように、過剰なサービスをするんです。装丁のギャラは決して高くはありませんが、いい意味で過剰に喜ばせると、それが後でまた返ってくるんだろうなというのが、自分の経験からの実感です。装丁を手かけた本が売れば、また頼んでもらえます。それは仕事以上のことをしていたということだろうと、後になって思います。その繰り返しが今につながっていると思うんです。

私はほとんど営業をしたことがありません。最初は劇団のポスターをやつていて、その主宰の男が戯曲集を出すというので装丁をしたのが最初でした。その後すぐに編集プロダクションが「うちのもやってくれ」と依頼をくれました。一つをやると、それが自然と書店で自己PRになり、それを見た別の出版社がまた頼んでくる。その繰り返しでした。どこかで失敗していればそこで止まって、別の生き方をしなければいけません、運よくつながってきました。

自分の引き出しを多くする日々の心がけ

質問 鈴木さんにお聞きしたいのですが、時間がない中で作品を仕上げていかれるときに、追いこんだところで出てくるものというのは、私は振り付けをやっていますが、少し似ているのかなと思います。普段の環境とか生活状態は、あまり外界と接していらっしゃる印象がありますが、普段どういふ生活をなさっていますか。

鈴木 基本的には原稿を読むことと、パソコンに向かってデータを作ること、ほとんどそれに尽きます。その間に寝たり食べたりしますが、大体それが基本。

ただ、単に仕事場にいたのでは、あらゆる著者や本に対応できません。視覚をコントロールする職業だから、見えるものは何でも見たいと思います。自分の中の引き出しを、できるだけ多く持っているようには心がけています。私は絵が好きなので、イラストレーターに限らず、画家の展覧会や、画廊が主催しているアートフェアなどには、大阪でも京都でも、どこにでも観に行きます。

また、長くこの仕事をやっていることもあつて、全国からイラストレーターが売り込みに来ます。自宅にはそのファイルのストックが何百もあつて、困ったときにはそれらをひっくり返して、合うイメージを探っていきます。引き出しとしてそういうものを確保しているわけです。そういう中で、今手がけている本や著者との接点を、常に可能性として準備するように、日ごろ心がけています。

少数の「根っからの善人・悪人」と大多数の「流動的な普通の人」

質問 井内先生のお話が大変論理的で驚きました。神様のお告げは、はっきりと論理的におりてくるのですか。

井内 はい。とても論理的です。先日福岡で開いたセミナーでは、ホワイトボードを使ってグラフを多用しました。お告げの中でもグラフで教えてくれることはよくあります。

私には靈感はまったくありませんし、神様と接点があるような家系でもありません。お告げは、こういう普通の人間にわかるようにおりてきます。だからそのまま伝えられるんだと思います。

高野 たとえばどんなグラフがおりてくるんですか？

井内 たとえば、善人と悪人の人口構成比です。Y軸が人数、X軸が善の度合いで、右へ行くほど悪です。世の中には、少数ですが、根っからの善人と、根っからの悪人がいます。普通の人には、善と悪との間を行ったり来たりして、流動的です。普通の人には安きに流れるから、悪の方へ行きやすいんです。

このグラフを頭の中に書かれたときは、はっとしました。神様が言う「悪人」は、根性が悪くて、嫉妬心や競争心が強い人です。あつちでもこつちでもいい顔をして、上手なことを言うけれど、自分のことしか考えていない人が、神様の言う悪人です。フィックスの善人と悪人は同じ比率で存在しているそうです。グラフは左右対称の線を描いています。

高野 私はよく「51%の善と49%の悪で僕らはバランスをとっている」と言いますが、それとも似ていますか？

井内 似ていますね。こういうグラフが頭の中におりてくるんです。

高野 根っからの悪人には救いがないのですか？

井内 ありません。「どんな人でも救う」とは一回も聞いたことがありません。「祈れよ、さらば救われん」なんてとんでもないと言われる。詫びて変えられるなら救われることもありますが、祈るだけで救われることはありません。反省すれば救いはありますが、反省することなくして、考えを変えることなくして、出てくる結果が変わることはありません。すぐ手厳しいことを言われます。手厳しいから結果が出るんだと思います。

高野 「目には目を」「歯には歯を」という言葉はおりてきませんか？

井内 それは悪人の考え方です。なぜなら、「目には目を」という考え方をしていると、どんだん心が汚れるから、血も汚れてくるんです。

神様が言うには、悪人というのは、されて悔しかったこと、嫌だったことを忘れないから、「目には目を」という発想にいてしまいます。善人は受けた恩を忘れないから、してもらって有り難かったことを覚えています。だから「目には目を」という発想はありません。「目には目を」という発想をもっていると、争いが絶えません。

鈴木 まったくそうだと思います。悪いことを考えていると、悪いことを呼ぶと思います。デザインでもそうですが、なんとか、唯一無二の著者の心を伝えようと思います。それをより多くの人に伝えよう、与えようとする、その気持ちはすごく大事で、それが絶対に伝わると思います。

井内 撮影のために福岡へお越しいただいたときに、鈴木先生が「考えて、考えて、考えて、極限まで考えたときに、ふっとおりてくる」とおっしゃいました。共通項を感じて、とても嬉しかったんですが、大勢の人の相談に乗っていると、その人が帰られた後、ひきずって、考え込みます。考えているときに、おりてくるんです。

鈴木 それは似ていますね。

井内 はい。だから先生がおっしゃったことがすごくわかりました。誰かのこと、何かのことに入り込んでいったときに、こういうもののおりてきます。なかでもグラフが一番おもしろくて、これはどこの本でも見たことがないなと思いました。

神様は、人間の世界と違うようなことはまったく言わず、とても現実的です。だからもっといろんな方に伝えたいと思うことが多いんです。

相手の腑に落ちて初めて仕事になる

質問 井内さんのたとえ話は神様から教わっているのですか、「人間・井内由佳」から出ているのですか？

井内 半々です。

質問 井内さんご自身の考え方、「伝えたい」という思いが、たとえ話になっているのですか？

井内 そうです。おりたお告げを伝えきって初めて私の仕事なので、私だけが知っていても、話すだけでも意味がありません。伝えきって、相手の腑に落ちないといけないから、同じことを神様から言われても、人によって言い方を変えたり、切り口を変えたりします。

高野 伝え方を変えていくのは、井内さんのアイデアですか？

井内 そうです。初めて来られる方には、探りながら伝えていきますが、何度もお会いしている人はだいたい傾向がわかるので、一人ひとりに合わせてお話しします。

文屋座の心

文屋代表 木下豊

信州小布施の出版社「文屋」は1999年1月に創業いたしました。これまで、すばらしいご著者の方々、そして幅広い層のすてきな読者様とのお縁に恵まれ、本づくりの歩みを進めることができました。みなさまのご理解とご支援に、心より感謝を申し上げます。

2011年、文屋は、出版の関連事業として「文屋座セミナー」を始めました。書き手と読み手と作り手のお縁を生かした、出会いと学びと語らいの場です。みずからの本来を考え、未来を創る、和やかなサロンとしての文化を、共に育てていきたいと思ひます。

ご縁を絆に――。

開催は年に数回。セミナーや交流夕食会、視察ツアーなどを予定しております。

「いいまち」「いい会社」をつくろうと力強く生きる人々と出会い、現地・現物の現実を五感で学びとる、多彩で楽しい内容になるように工夫いたします。運営へのご助言もいただくと幸いです。

みなさまのご健康とご多幸を祈念いたします。それぞれの人が、それぞれのつとめを果たしあう、よりよい世の中になってゆくことを願いつつ。

発行日 2012(平成24)年2月25日

編集・発行 文屋 代表 木下 豊 〒381-0204 長野県上高井郡小布施町飯田45
TEL:026-242-6512 050-8600-1714 FAX:026-242-6513 <http://www.e-denen.net> e-mail: bunya@e-denen.net

文章構成 中島 敏子

撮 影 古川 耕伍

程度の大きい善行・悪行はわが子の幸・不幸に

質問 前世は別の動物だったとか、生まれ変わりということはあるのですか？

井内 ありません。人間は生まれ変わりがないと神様から聞いています。従って前世もない。亡くなったら終わりです。前世が犬とか猫だったということもありません。

高野 他の宗教やヨガの世界だと、以前に自分が経験したことをまた思い出すということがよくありますが、それも基本的にはないと神様はおっしゃっているんですか？

井内 ないそうです。あの世の地獄・天国というのは、人間が古来から、立派な宗教の先生方が、いい人間になるために概念的にそういう世界を作り上げたのであって、実在はしないと神様から聞いています。だからもし、あの世の地獄・極楽があるとしたら、それは自分の子どもの幸・不幸なんだそうです。自分がやってきたこと、考えてきたことが、すごく悪いときやすごくいいときは子どもに出ます。少しだけいいとき、悪いときは、自分に出ます。善悪の程度が大きければ大きいほど、子どもに出るそうです。

自信をもって見せられる最低レベルだけは守りたい

質問 鈴木先生、仕事へのこだわりがあればお聞かせください。

鈴木 書店へ行くと、「これを世に形として出すのは恥ずかしい」と感じるようなものを見かけます。やはり自分の中で、最低限、自分が恥じてしまうような仕事は絶対にしたくありません。自分で納得して、自信をもって、人に見せられる。その最低レベルは、締切を過ぎてでも守りたいです(笑)。

高野 「このレベルは恥ずかしいだろう」と思われる、鈴木さんのスタンダードが相当高いんだろうと思います。ホテルの仕事もそうですが、一生懸命さはわかるけど……と思うときがある。レベル的にどこまで自分自身を追いつめて、判断基準を自分の軸として持てるかどうかですね。

鈴木成一さんプロフィール

装丁家。北海道生まれ。筑波大学在学中から装丁の仕事始める。1992年に鈴木成一デザイン室を設立。1994年、講談社出版文化賞ブックデザイン賞を受賞。NHK「プロフェッショナル 仕事の流儀」に出演したときのテーマは「誇りは自分で創り出す」。毎日放送「情熱大陸」にも登場。著書『装丁を語る』(イースト・プレス)。2012年には、2冊の自著を上梓する予定。

信州小布施から世界へ
美日常をプロデュース

文屋
bunya